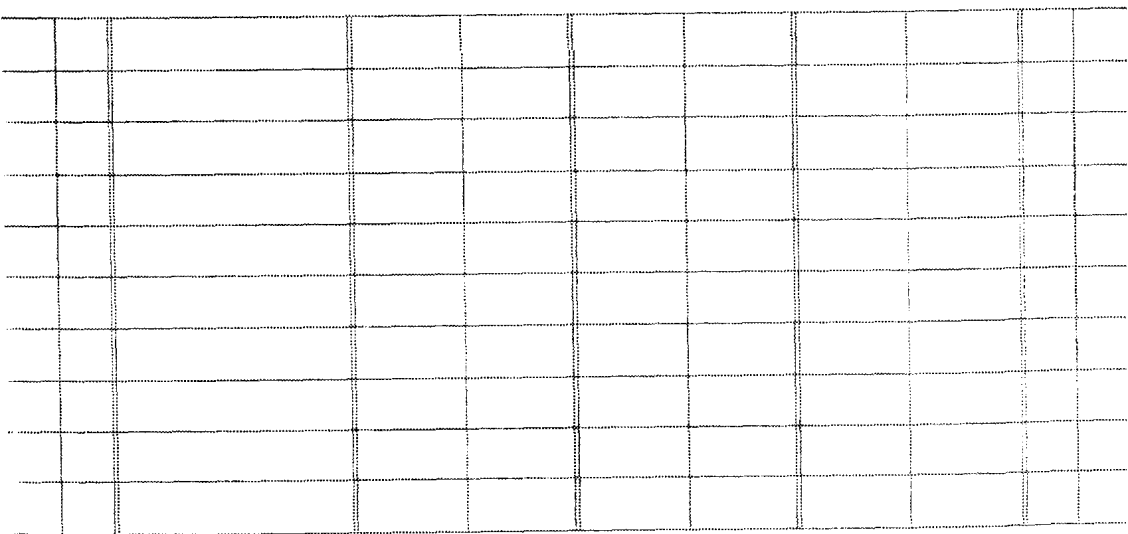


完全簿記教程 I

複式簿記の基礎と技術

増補改訂

沼田嘉穂著



中央経済社

＜著者紹介＞

東京に生れ、東京に育つ。日比谷小学校、錦城中学校を経て、昭和5年東京商科大学（現・一橋大学）本科を卒業。鹿児島高商教授、横浜専門学校教授、東京商科大学講師、海軍経理学校嘱託教授などを歴任し、昭和14年横浜高等商業学校教授となり、戦後同校昇格とともに横浜国立大学経済学部教授、昭和46年停年退職と同時に同大学名誉教授。同年駒沢大学経営学部教授。昭和27年より税理士試験委員を委嘱され、昭和46年まで20年間にわたり簿記論を担当。なお昭和44年より税理士試験常任委員を委嘱され、昭和46年同委員会の終了まで勤む。商学博士。

主著：近代簿記（中央経済社）、体系簿記会計問題精説（同上）、簿記自習（同上）、簿記論攻（同上）、帳簿組織（同上）、商業簿記（同上）、固定資産会計（ダイヤモンド社）、簿記教科書（同文館）、会計教科書（同上）、原価計算・工業簿記教科書（同上）、企業会計原則を裁く、減価償却の理論と実務（同上）、減価償却の知識（日本経済新聞社）、やさしい会計学（同上）、商法による財務諸表の知識（同上）、簿記入門（光文社）。

完全簿記教程〔Ⅰ〕〔増補改訂版〕

昭和46年1月20日	初 版 発 行
昭和54年10月15日	93 版 発 行
昭和55年6月10日	改 訂 版 発 行
昭和58年2月10日	増補改訂版発行

著 者	沼 田 嘉 穂
発 行 者	渡 辺 正 一
印 刷 者	長 宗 泰 造

発行所 株式会社 中央経済社

東京都千代田区神田神保町1～31～2
電話 (293) 3 3 7 1 (編集部)
(293) 3 3 8 1 (営業部)
振替口座・東京 0—8 4 3 2

落丁・乱丁本はお取替え致します。 厚徳社／関川製本

ISBN 4-481-00041-4 C 3334

小 序

完全簿記教程は全3巻からなり、その書名の示すとおり、学習簿記としての完全教程を目標とした。その内容は本書の序章で詳述したとおりであるが、説明の詳細・懇切、例題・練習問題の豊富なことは他の簿記書にその類例がなく、かつ問題については全解を付し、記帳練習の効果を完全に挙げうるよう仕組んだ。すなわち、すべての点について完璧な簿記書として完成した。あとは学習者の努力にまっばかりである。

全巻にわたって例題を示しながら具体的に説明し、なおこれを理解しえたか否かを学習者が自分で試すことができるように、章末にテストを設けた。学習に当ってテストの答を書きとめ、これと巻末の解答とを照合して、もし誤っていたならば、更に本文を精読して理解し、覚え込むべきである。

また各章とも章末に記帳練習問題を設けた。学習者はまず本文の例題を記帳してみて、それが完全に出来たならば、つぎに章末の記帳練習問題を記帳すべきである。その結果を解答と照合し、自己添削する。記帳は何回となく繰返して行ない、記帳技術の熟練による記帳時間の短縮を計らなければならない。

第Ⅰ巻では複式簿記の基礎理論をサービス業を対象として解り易く取扱い、加えて売買業簿記の基本原則を述べた。第Ⅱ巻では売買業を対象とし、とくに帳簿組織と決算整理についての簿記の機構に重点を置いて説明を進めた。第Ⅲ巻では株式会社の計算と特殊問題を中心として、かなり高度の説明にまで進展し、複式簿記の全部の内容を完結した。学習者は全3巻の学習によって複式簿記についての総括的な完全な知識をえ、なお例題、問題の記帳練習を繰返すことによって十分な記帳および計算技能が身に付くものと思う。

第Ⅰ巻で行なった複式簿記の基礎理論の説明内容は、つぎの分類と順序による。

- (1) 複式簿記の5概念の説明……第2章、第3章

2 小 序

- (2) 貸借記入の原則……第4章
- (3) 複式簿記の帳簿——仕訳帳と元帳……第5章
- (4) 複式簿記の構造と決算……第6章、第7章
- (5) 以上のまとめとしての説明……第8章
- (6) 売買業簿記の基本原則……第9章

第Ⅰ巻はとくに複式簿記の基礎概念および技術の導入を目的とする上から、説明の平易、例題の簡単を十分に考慮した。いかなる学問もこれを究めるためには、その基本を完全に修得することを忘れてはならない。簿記学もまた例外ではない。学習者はあるいは本書の説明内容および記帳が余りにも幼稚であり、冗漫すぎると思われる場合もあるであろう。しかし説明の進展とともに急速にその内容は複雑となり、むずかしくなる。このため少しく進むと、むしろ付いて行くのに努力を要するであろう。よって基礎部分の平易性に飽きてはならない。

本書は三色刷りにより、なお図表はすべてトレースによった。これも本書の特徴の一つである。学習者はこれによって帳簿記入のありのままを見ることができる。

増補改訂版の序

本書は昭和46年に初版を公刊した。その後、毎年増刷を続けて今日に至った。増刷のつど精読して、用語等の正確・適切を期して修正を重ねてきた。とくに今般、全巻にわたり、精読・再考し、単に正確・適切性のみならず、簿記学の本质と学習者の学習効果を熟考し、かなりの部分を書替え、説明を増補した。このため増補改訂版とした。

本書が広く簿記学習の基本書として利用され、最高の効果を発揮することを念願するとともに、併せて学習者諸君が努力されることを望んで止まない。

昭和58年2月

著 者 沼 田 嘉 穂

目 次

序 章 簿記の学習について

学問としての簿記学の性質	3
学習の立場から見た簿記学の本質	4
簿記学習の態度——訓練による技能の体得	6
簿記学習の手段	7
自習書としての本書の目標と著者の意思	9
本書の内容と学習の結果	10

第1章 記帳技術の基礎

§1 帳簿記入の内容	13
§2 記帳の方法——文字・数字の書き方	14
§3 帳簿の作成——罫線の引き方	16
§4 現金出納帳の記入例示	18
【テスト】	20
記帳練習問題（1）	21
記帳練習問題（2）	21

第2章 資産、負債、資本と貸借対照表

§5 複式簿記とその基本概念	23
§6 資産の概念	24
§7 負債の概念	25
§8 資本の概念	26
§9 財産状態と貸借対照表	28
§10 資産、負債および資本の相互関係	30
【テスト】	31

2 目 次

記帳練習問題（３）	32
記帳練習問題（４）	32

第３章 利益、損失と損益計算書

§ 11 利益と損失	33
§ 12 資本等式と利益、損失の関係	34
§ 13 損益の発生取引についての注意点	35
§ 14 取引による資産、負債および資本の変化	37
§ 15 取引による損益の発生と損益計算書	41
【テスト】	43
記帳練習問題（５）	44
記帳練習問題（６）	45

第４章 勘定科目と貸借記入

§ 16 計算単位としての勘定科目	47
§ 17 勘定科目の設定方法と記入内容	49
§ 18 勘定科目と増減記入の方法	50
§ 19 借方、貸方の用語と貸借記入原則	51
§ 20 取引要素と貸借記入原則	55
【テスト】	60
記帳練習問題（７）	60
記帳練習問題（８）	60

第５章 仕訳および仕訳帳と元帳

§ 21 元帳とその記入	61
§ 22 元帳の口座の設定	64
§ 23 元帳の勘定形式による貸借記入原則の表示と例題の記入	66
§ 24 仕訳と仕訳帳	67

§ 25 仕訳帳の職能と仕訳の本体	73
§ 26 元帳の記入——転記	73
§ 27 元帳の性質とその職能	80
【テスト】	81
記帳練習問題（9）	82
記帳練習問題（10）	84

第6章 試算表とその職能

§ 28 合計試算表	85
§ 29 残高試算表と試算表等式	86
§ 30 試算表の誤謬の発見職能	87
§ 31 試算表の財務諸表的職能	89
§ 32 試算表を作る必要とその作成時期	92
【テスト】	93
記帳練習問題（11）	94
記帳練習問題（12）	94

第7章 決算と帳簿決算手続

§ 33 決算の意義と決算手続	95
§ 34 振替と振替仕訳	96
§ 35 損益勘定の設定と損益振替	97
§ 36 純利益の資本金勘定への振替	101
§ 37 残高勘定の設定と残高振替	102
§ 38 帳簿の締切	106
§ 39 財務諸表の作成	109
§ 40 開始記入手続	112
§ 41 大陸式と英米式決算手続の相違	115
§ 42 簿記一巡の順序と簿記の任務	120

4 目 次

【テスト】	121
記帳練習問題 (13)	122
記帳練習問題 (14)	122

第8章 簿記の前提と諸概念並びに機構

§ 43 簿記の三つの前提	123
§ 44 取引の概念と取引の種類	125
§ 45 勘定の分類とその性質	128
§ 46 精算表と簿記の構造	129
§ 47 損益に属する勘定は資本金勘定の支店である	132
【テスト】	136
記帳練習問題 (15)	137
記帳練習問題 (16)	140

第9章 商 品 勘 定

§ 48 商品の売買は商品勘定で処理する	145
§ 49 総記法による商品勘定の記入	151
§ 50 商品勘定の決算手続	154
§ 51 販売益勘定の設定と整理仕訳	157
§ 52 決算整理を精算表で示すこと——8欄精算表	160
§ 53 商品売買についての補助簿——仕入帳および売上帳	171
§ 54 仕入帳、売上帳を使う場合の帳簿組織	173
§ 55 現金出納取引についての補助簿——現金出納帳	174
【テスト】	176
記帳練習問題 (17)	177
記帳練習問題 (18)	177

解 答 編	181
索 引	225

完 全 簿 記 教 程〔Ⅰ〕

複式簿記の基礎と技術

序章 簿記の学習について

学問としての簿記学の性質

この〔I〕巻は簿記の知識の全くない読者に、簿記の基礎知識を与え、また基礎的な記帳と計算の技能を身につけていただくことを目的とする。まず本論の説明を始めるまえに

- イ 簿記学はどのような学問であるか
- ロ 簿記を学習するには、どのような態度が必要であるか
- ハ 簿記が修得されたということは、どのような知識と技能が身についたことを意味するか
- ニ 簿記を学ぶ手段としては、どのような方法があるか

の4点を明らかにして、読者の自覚を促す必要がある。

なおこれに先立って簿記学のみでなく、すべての学問に共通的な学習上の重点を一言しよう。それは基本概念の理解を十分にすることである。科学はすべて、それぞれの固有の基本概念（普通にこれを原理、原則または理論などという）を持つものであり、終始その基本概念を前提として進展する。このためまず基礎原理を完全に理解し、覚え込むことが学問を修得する前提である。学習者は、ときに先を急ぐのあまり、基礎部分の学習に欠けることが多い。その結果、学習に支障を生じ、ときに途中で断念してしまうようなことも起りうる。

学問によって基礎原理の簡単なものも複雑なものもある。簿記の基礎原理は簡単であって、理解は容易である。とはいえ、いかなる学問でも、初めて学ぶ人にとっては、その学問に特有な概念は、そう簡単に理解しえ、適用しうるものではない。このことは簿記についても例外ではない。よって簿記を初めて学ぶ人は最初の基礎部分を熟読し、その本質を理解すべきで、決して先を急いで

4 序章 簿記の学習について

はならない。

さて以上のことを前置きして、前述の4点を説明しよう。

まず(イ)の簿記はどのような学問であるか、についてであるが、ごく平易にいうと、簿記は企業の経済活動を記帳し、計算し、その結果として企業がどのような財貨・債権を保有し、負債を負っているか、また営業の結果、どれだけの利益もしくは損失があったかを明らかにすることを目的とする。すなわち、簿記は記帳と計算とが直接の手段であり、任務である。このように簿記が一面計算を任務とすることからは、簿記は数学に近い学問である。ただし簿記の行なう計算は、加算と減算がその大部分であり、数学としては初等算術の範囲を出ないものである。

計算と同時に記帳が簿記の任務であり、主体の一つであるが、これについて簿記固有の原則と技術とがある。簿記の重点は記帳の原則と技術の部面にあるとみてよい。

学習の立場から見た簿記学の本質

ここで簿記学の本質について、学習の立場から心得ておかなければならない点を挙げよう。それはつぎのとおりである。

- (1) 累積的学問であること
- (2) 形式的部面が重視されること
- (3) 技術的色彩が強いこと

学問はその知識体系から見て、横の、または平面的の学問と、縦の、または累積的の学問とがある。この分類はとくに学習の上から重要である。平面的な学問の代表的なものは地理学である。地理学では例えばイギリスを学び、ドイツを学ぶ。イギリスの知識はドイツの学習には両国の相互関係または相互比較をする場合を除き無関係である。累積的学問の例として数学を挙げることができる。代数でも幾何でも、ある問題を解答し、その結果として定理を樹立する。つぎにその定理を適用してより高度の次の問題を解く。すなわち知識を積立て方式によって進展する。

平面的な学問にあっては一部分の学習を行なわないでも、次の学習にはほとんどさしつかえない。これに反して、累積的学問にあっては、前段階が理解できないと、それから先は全く解らない。このため順を追ひ、中間を飛ばさないように学習することが要訣である。簿記は数学と同様に完全な累積的学問である。

つぎに学問には実質を主体とするものと形式を重視するものがある。概して理論的な学問は実質主体であり、技術的な学問は形式を重視する。理論は平易に言えば「ものの道理」であるから、考えれば解る場合が多く、とくに初歩的理論は概して解り易い。例えば経済学では、その基本理論の一つとして需要供給の原則がある。これはものの価格と需給関係の原則で、需要が供給に比して多ければ価格が騰貴し、反対の場合には価格が下落することをいう。この原則は教えられなくても常識のある者なら考えれば解る道理である。

形式原則はその背後に実質的な道理を持つものではないから、ただ考えただけでは解らない。このためこれを知るには教えられ、覚え込む以外に方法はない。形式原則の好例は交通規則である。青は進め、赤は止れ、という原則は単なる形式原則であって、純然たる約束ごとであるから、道理からは割り出しえず、教えられて覚える以外に方法はない。徒歩以外に移動手段のない未開国の人間が、文明国に突然現われたとき、彼は交通信号の指標の意味を他人から教えられ、覚える以外に知る手段はない。

簿記には形式的原則がかなり多い。このため簿記の諸原則は習って覚え込むことが要点である。形式的原則は理論的原則に比して簡単である。しかしその修得には覚え込む以外に方法がない。この点が簿記学の特徴の一つである。

実質的学問は理論的学問であり、形式的学問は多分に技術を主体とする学問である。もちろん理論のみ、または技術のみの学問は稀であり、理論を主体とする学問でも幾分か技術は持つものである。また技術を主体とする学問といっても、単なる技術のみでは科学ということはできない（この点で算盤そろばんは学問としては成立しない）。簿記もそれが科学としての簿記学である限り、記帳・計算についての理論をもっている。しかし技術がかなりのウエート(重さ)を占めていることも明らかである。技術は単に書物を読んで学習するだけでは修得でき

ない。それは記帳訓練によって得られる。この点をつぎに述べよう。

簿記学習の態度——訓練による技能の体得

理論を主体とする学科の学習には書物を精読して了解し、かつその本質を熟考するにある。技術を主体とする学科についても、まず書物を精読し、その内容を理解し、かつ形式については、前節に述べたようにそれを覚え込むことが重要である。しかし単にこれをもって満足することはできず、これに加えて記帳練習をして、技術の体得をしなければならない。かりに理論の理解を学習(Learning)というならば、技能の体得を目的とする行為を練習もしくは訓練(Training)ということができよう。簿記は単に学習だけをしていたのでは技能が身に付かないから、現実に記帳することができない。このため簿記では学習とともに記帳練習が重要である。いわば簿記の修得(master)には当然、記帳練習が重要な部分を占めるといいうる。

このことは各章の説明を読み、理解したならば、次に必ずその章に関連した練習問題の記帳を行なわなければならない。これなしには簿記の修得は不可能である。なお練習問題は1回記帳してその結果が解答に一致したからといって、その学習が完成し、終わったものと思ってはならない。何回でも繰返して記帳し、その記帳時間の短縮を計らなければならない。この点、簿記は算盤術と非常によく似ている。算盤はゆっくり行なえば誰にでもできる。その技能は速さにある。簿記も同様で、実務的には一定量の仕事を一定の時間内にこなさなければならない。よって簿記の技能の体得は、一面、その速さにあり、これは記帳練習によってのみ達成しうるものである。要するに簿記の学習には、絶えず記帳練習を行なうことが重点である。

とくにある試験を目標として簿記の学習をする場合、記帳熟練は重要である。なお簿記は一面計算であるから、算盤の技能のあるなしでは、解答の作成上、大きな差異を生ずる。このため算盤(または計算器)についてある程度の技能を持つことは必然的な前提となる。読者はこの点を十分に心得て、加減計算だけは普通のできるだけの技能を持つように練習すべきである。

簿記を学習した結果、「簿記ができるようになった」ということは、どのような知識・技能を持つに至ったことを意味するのであろうか。知識は暫く別とし、技能については、正確、迅速および優美の三つの条件をみたすに足る腕前を持つことをいう。

簿記は計算を目的の一つとする。計算は正確でなければならない。このため正確性は第1の条件である。これは多分に算盤の技能によって支配される。

簿記学は実務学である。上述のように実務では一定の時間にある量の仕事を仕上げなければならない。この技能が達成されてこそ簿記が身に付いたといえる。すなわち迅速性の達成は簿記修得の一つの条件である。企業では記帳を他人に見せなければならないし、また他人と協同して、記帳しなければならない場合も多い。このことは記帳が他人に解るようにできていなければならない。それには定まった形式が守られ、きれいに書かれていなければならない。形式の遵守並びに明瞭の記入を優美の原則という言葉で示すとき、これが簿記の技能の一つの条件となる。試みに銀行、商社などで、有能な会計係の行なった記帳を見せてもらいなさい。それは全く美術品としての価値を持つものである。一字の書き方、一線の引き方に至るまで定則どおりに、かつ美しく書かれている。ただし最近では機械簿記の発展と普及で、大企業では手記入が著しく減少し、この種の特殊技能を持つ人も少なくなったと思われる。しかし学習上、とくに形式を遵守することは重要である。

簿記学習の手段

簿記を学習するにはどのような手段、方法があるかを述べておこう。

簿記学の学習もことごとくの学科と同様、その手段として(1)学校教育、(2)自習、(3)講習会、(4)通信教育など多くの方法がある。学習方法として最も一般の姿は学校教育である。いずれの学問についても多少の差はあれ、単に本を読んだだけでは理解しえない点があるもので、現実に教師が実技、説明などで示すことが学習の焦点である場合もある。これはとくに音楽、語学などの実技学科ほど強度である。しかし理論的な学科ほど読書による自習で学習しうる範囲が

広い。もちろんこの場合でも教師による適切な説明は学習効果をあげる上では偉大な役割を果たすことは否めない。なおそれには有能な教師と、これについて行けるだけの学習者の努力が前提となる。以上の点から教師が学習の先導者となる学校教育は形式的には最良の学習方法である。しかし今日の学校教育の現状を省みるとき、実質的にはどうであろうか。

かりに有能な教師と学生のある程度の真剣な学習態度とを前提としてみても、例を今日の大学教育にとって見ると、その学習時間は余りにも少ない。文部省の定めでは授業日数は年間35週間であり、この期間に1週1回1単元(1時間40分)の授業が標準時間である。かりに規定どおりのフル授業が行なわれたにしても、これを時間に換算すると年間58時間の授業時間に過ぎない。現実にはこのようなフル授業は望むべくもなく、最高8掛程度。普通は7掛以下の授業時間に終わるものと思われる。いかなる学問でも40時間ぐらいの授業で修得するものはありえないし、とくに簿記の場合、記帳実技の体得を要するから、そのような教育で学習しうるのははずがない。学校でいかに真面目にその講義を聴き、教師の指導に従って記帳をしても、学校での学習のみで公認会計士や税理士の試験に合格した者があるはずはない。合格者の大部分はその知識技能の大半を自習による努力で得ていることは確かである。

学校教育以外の方法で教師の指導によるものとしては個人教授および講習会である。個人教授はよき指導者を得れば最良の方法であるが一般には望みえない。講習会で長期にわたるものは学校教育とほぼ同様である。短期または数回の講習会は、ある定った目的(例えば税理士試験のための講習会のごとき)のものであれば、最後の仕上げまたは特定の目的についてのコツを得るためには有効であるが、学問そのものの本来の学習にはほとんど役立つところはない。

通信教育は自習の上に学校教育の長所を織り込んだものである。とくに簿記の場合、記帳の上で、教科書のみでは説明しにくい点がある。これを添削指導によって補うもので、私は簿記学の性質から見て、それは通信教育に最も適合した学問であるとの意見を早くから持っており、その考え方は今日も変わりはなく。しかしこの場合にも、それが有効であるためには一つの前提がある。そ